

溜^{ため}西^{にし}遺^い跡^{せき}

令和2年7月

宇都宮市教育委員会

序

溜西遺跡は、宇都宮市若松原一丁目に所在する遺跡です。周辺には、十里木古墳や二軒屋遺跡、北若松原遺跡、若松原南遺跡、溜西南遺跡など、縄文時代から平安時代にかけての集落が多数ある地域であります。平成29年度には、近隣の溜西南遺跡から古墳時代の竪穴住居跡2軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡3軒が確認されており、溜西遺跡を含めたこの地域には大規模な集落があったことが伺えます。

今回、トヨタウッドユーホーム株式会社の宅地造成に伴い、影響を受けることになった本遺跡の取り扱いにつきまして、事業者をはじめ、関係機関と協議の上、遺構の保存が行えない部分について、記録保存のための発掘調査を実施することとなりました。調査の結果、古墳時代末から奈良平安時代にかけての住居跡が5軒確認され、古代の集落の様子を知る貴重な資料を得ることができました。

本報告書は、今回の発掘調査において得られた成果をまとめたものであり、多くの方々にさまざまな方面でご活用いただければ幸いです。

最後になりますが、埋蔵文化財の取り扱いの協議から発掘調査、そして報告書作成・刊行に至るまで多大なるご理解とご協力をいただきました関係各位、関係機関に対しまして、厚く御礼申し上げます。

令和2年7月

宇都宮市教育委員会
教育長 小堀 茂雄

例言

- 1 本報告書は、栃木県宇都宮市若松原1丁目1080-19、1081-1に所在する溜西遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は令和2年1月6日から同月25日まで実施した。調査に当たっては事業主より委託を受けた㈲日本窯業史研究所（調査担当：三輪孝幸）が宇都宮市教育委員会の指導のもと実施した。費用は事業主が負担した。
- 3 調査実施面積は420㎡である。
- 4 本報告書の編集は、宇都宮市教育委員会の指導のもと、三輪が担当した。執筆は第1章第1節を宇都宮市教育委員会文化課が、そのほかを三輪が執筆した。
- 5 本遺跡出土の遺物及び図面・写真等の記録類は、宇都宮市教育委員会で保管している。
- 6 調査組織は以下の通りである。

調査指導 宇都宮市教育委員会 教育長 小堀茂雄
教育次長 菊池康夫
文化課長 山口達雄
文化課主幹 今平利幸
文化課文化財保護グループ係長 前原義之
文化財保護グループ 竹下 亘・星野治彦

調査主体者 ㈲日本窯業史研究所 代表取締役 菅間裕二
調査担当者 三輪孝幸

- 7 調査及び報告書の作成にあたり、次の方々からご協力を賜った。ここに記して感謝の意を表したい。（敬称略・順不同）

株本俊夫 トヨタウッドユーホーム㈱ 國安商事㈱ ㈱大藤工業 ㈱広北関東

凡例

- 1 地形図は国土地理院発行1/25,000「宇都宮東部・宇都宮西部・上三川・壬生」を部分使用した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表で使用した記号は次の通りである。

竪穴住居跡-SI 土坑-SK 溝-SD ビット-P

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、以下の通りである。

(1) 遺構図は60分の1、遺物は3分の1に縮小し、その他は適宜縮尺を変えて掲載した。

(2) 遺構・遺物実測図中の表示は、次の通りである。

■ カマド構築材 □ 粘土 ■ 焼土 ○ 掘方

● 土器 ▲ 石製品 ■ 須恵器断面

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小川正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

- 5 遺物観察表の作成方法については、次の通りである。

計測値の（ ）内の数値は推定値を示した。計測値の単位はcm、gで示した。

目次

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経緯	2
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	7
(1) 竪穴住居跡	7
(2) 土坑	18
(3) 溝	18
(4) ビット	21
(5) 遺構外出土遺物	22
第4節 総括	23

挿図目次

第1図 トレンチ配置図	第13図 SI04カマド
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡	第14図 SI04出土遺物
第3図 全体図	第15図 SI05
第4図 基本層序	第16図 SI05カマド
第5図 SI01	第17図 SI05出土遺物
第6図 SI01カマド	第18図 SK01
第7図 SI01出土遺物	第19図 SD01
第8図 SI02A・B	第20図 SD01～04
第9図 SI02Aカマド	第21図 SD01出土遺物
第10図 SI02出土遺物	第22図 ビット
第11図 SI03及び出土遺物	第23図 遺構外出土遺物
第12図 SI04	

表目次

第1表 周辺の遺跡一覧	第6表 SI05出土遺物観察表
第2表 SI01出土遺物観察表	第7表 SD01出土遺物観察表
第3表 SI02出土遺物観察表	第8表 ビット一覧表
第4表 SI03出土遺物観察表	第9表 遺構外出土遺物観察表
第5表 SI04出土遺物観察表	第10表 遺構一覧表（竪穴住居跡）

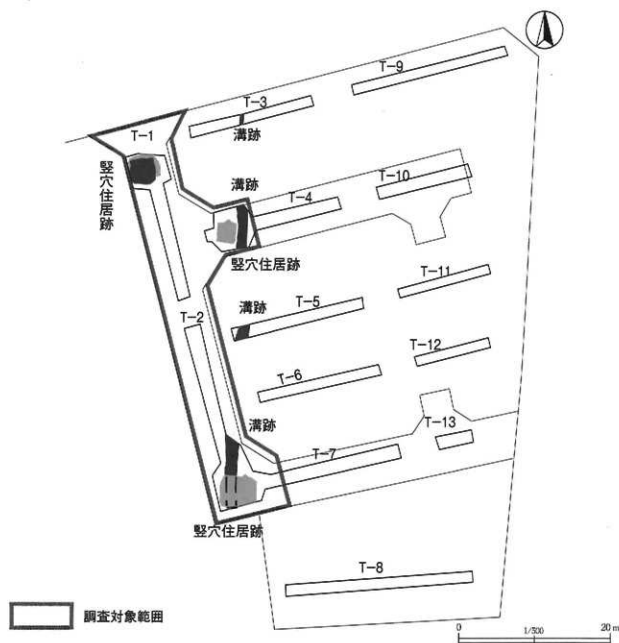
図版目次

- 図版1 調査区全景北（西から） 調査区全景南（西から）
- 図版2 遺構確認状況（南から） 基本層序（西から） SI01（南から） SI01掘方（南から） SI01カマド（南から） SI02（南から） SI02掘方（南から） SI02カマド（南から）
- 図版3 SI02カマド掘方（南から） SI02遺物出土状況（東から） SI02遺物出土状況（東から） SI02土層断面（東から） SI03（東から） SI03掘方（南から） SI04（東から） SI04掘方（東から）
- 図版4 SI04カマド（南から） SI04カマド掘方（南から） SI05（東から） SI05掘方（東から） SI05カマド（南から） SI05カマド掘方（南から） SI05土層断面（東から） SI05床面焼土（西から）
- 図版5 SI05遺物出土状況（東から） SD01（南から） SD01（北から） SD01土層断面（南から） SD01土層断面（北から） SD01遺物出土状況（西から） SK01（南から） SK01土層断面（南から）
- 図版6 SI01出土遺物 SI02出土遺物
- 図版7 SI02出土遺物 SI03出土遺物 SI04出土遺物
- 図版8 SI04出土遺物 SI05出土遺物
- 図版9 SI05出土遺物 SD01出土遺物 遺構外出土遺物

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯 (第1図)

令和元年9月11日付けで、開発事業者のトヨタウッドユーホーム株式会社により、宇都宮市若松原1丁目1080番19、1081番1の溜西遺跡(県番号4192)で予定されている宅地造成に伴う、文化財保護法93条の届出が提出された。市教育委員会文化課より栃木県教育委員会文化財課(以下県文化財課)へ進達し、これに対し県文化財課より確認調査が必要である旨の指示が10月17日付けであったため、事業者と協議し確認調査を実施することになった。



第1図 トレンチ配置図

確認調査は令和元年10月23～24日に宅地造成予定地、11月26日に道路拡幅部分を実施した。調査は、宅地造成が予定されている場所は13本の試掘溝を、道路拡幅部分は1本の試掘溝を設定し、遺構の有無を確認した。調査の結果、宅地造成内の道路予定地から3軒の竪穴住居跡が確認された。

この調査結果を12月2日付けで事業者側に通知し、協議した結果、工法等の事業計画の変更は難しいとの結論に至ったため、開発区域内の道路予定地約420㎡について記録保存の発掘調査を実施することとなった。発掘費用の費用負担に関しては、土地所有者である株本俊夫が負担することとなり宇都宮市教育委員会教育長小堀茂雄と埋蔵文化財に関する覚書の交換を行った。

発掘調査は、市教育委員会の指導のもと、株式会社日本窯業史研究所が調査主体者となり行った。

第2節 調査経緯

確認調査の結果から、調査範囲を開発区域内の道路部分のうちの市教委文化課の指定範囲420㎡とし、調査を行った。

調査は、令和2年1月6日から25日まで行った。4日に事前準備として機材搬入と調査区の設定を行う。表土掘削作業を6・7日、遺構確認作業を10・11日に行う。14日より遺構の掘削を行い、逐次土層断面図の作成、平面図の作成を行う。16日からはカマドの調査も並行して行う。16・17日基本層序作成のためのテストピットの掘削を行い、20日に作図を行う。17日からはS101・02の掘方掘削、土層断面図の作成を行う。22日に調査区全体の清掃と全景写真撮影を行う。24日にS104のカマド掘方の写真撮影と平面図作成、S105掘方の写真撮影と平面図作成を行う。同日、市教委文化課により終了確認を行う。25日埋戻しと機材撤収を行い、すべての作業を終了した。27日宇都宮南警察署に遺失物届を提出する。

室内作業は出土遺物の洗浄・注記、遺構図・写真の整理、トレース、出土遺物のピックアップ、実測・トレースを行う。遺物の写真撮影後、挿図・写真図版の作成、原稿執筆作業を行い、印刷・校正を経た後報告書の刊行を行った。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

本遺跡は栃木県宇都宮市若松原1丁目地内に位置している。宇都宮市は栃木県の県央部に位置し、北にさくら市、塩谷郡塩谷町、東は塩谷郡高根沢町、芳賀郡芳賀町、南は下野市、真岡市、河内郡上三川町、西は日光市、鹿沼市、下都賀郡壬生町と隣接している。遺跡は市の南部、市街地から南に約6kmに位置している。遺跡の北0.4kmには国道121号線（宇都宮環状道路）が東西に、東0.4kmには国道4号線が通り、東0.7～0.9kmには東北新幹線、JR宇都宮線がともに南北に通り、南東1kmには雀宮駅が位置している。

宇都宮市は関東平野の北端に位置し、北西部に広がる日光・足尾山地帯と平野部の変換地帯に立地している。地形は西部の山地から続く鹿沼台地、中央部の田原・宝木台地、鬼怒川の周辺に発達した沖積地、及び鬼怒川左岸の宝積寺台地に大まかに分けられる。遺跡は中央部の宝木台地上に立地している。台地は南北に細長く伸びており、本遺跡周辺では新川・兵庫川・西川田川等の幾筋もの河川によって台地は樹枝状に開折され、そのうちの姿川に合流する小河川新川の右岸に遺跡は立地している。遺跡の標高は91.7mである。

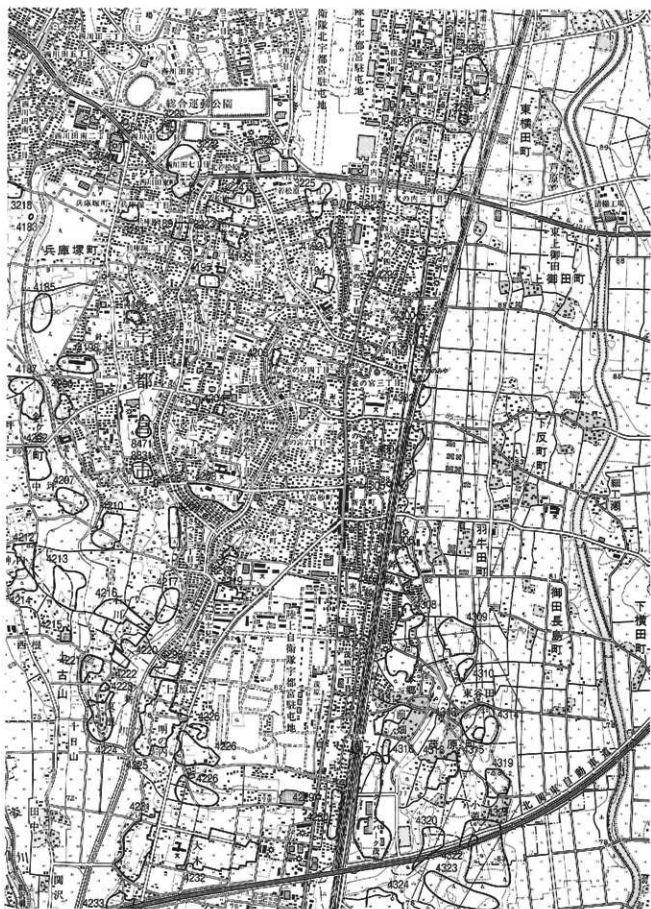
第2節 歴史的環境（第2図）

本遺跡周辺では縄文時代以降多数の遺跡が確認され、宝木台地上には広く遺跡が密集している。縄文時代は、旭ヶ丘団地遺跡、若松原遺跡、立海遺跡、見明遺跡、赤岩遺跡などが確認され、当遺跡の西方および南西地域に集中する傾向が認められ、兵庫川・西川田川沿いに小集落が営まれたものと考えられる。弥生時代は、遺跡数が減少するが、縄文時代とほぼ同じ地域に遺跡の分布が認められ、後期の標識遺跡となった二軒屋遺跡は当遺跡の西方約0.7kmに位置し、針ヶ谷新田遺跡では、同時期の竪穴住居跡が6軒確認されている。古墳時代は遺跡数が激増し、台地全体に分布するようになる。本遺跡周辺では、溜西南遺跡で前期から後期にかけての竪穴住居跡21軒、土坑2基が確認されている。また、北若松原遺跡で竪穴住居跡が25軒確認され、当遺跡の西方約1kmに位置する塚山古墳群の造営に深くかかわった集落と考えられている。古墳では全長98mの塚山古墳を主墳とする塚山古墳群が西・南古墳と合わせて三世代にわたって造営されたと考えられている。そのほか中期では画文帯神獸鏡が出土した雀宮牛塚古墳、後期では横穴式石室を持った十里木古墳、小型の円墳群が調査された針ヶ谷新田古墳群などがある。奈良平安時代では古墳時代に継続して集落が営まれたと考えられ、その分布も広範囲に及んでいる。

参考文献

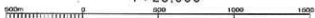
宇都宮市教育委員会 2017 『溜西南遺跡』

宇都宮市教育委員会 2019 『北若松原遺跡 若松原遺跡』



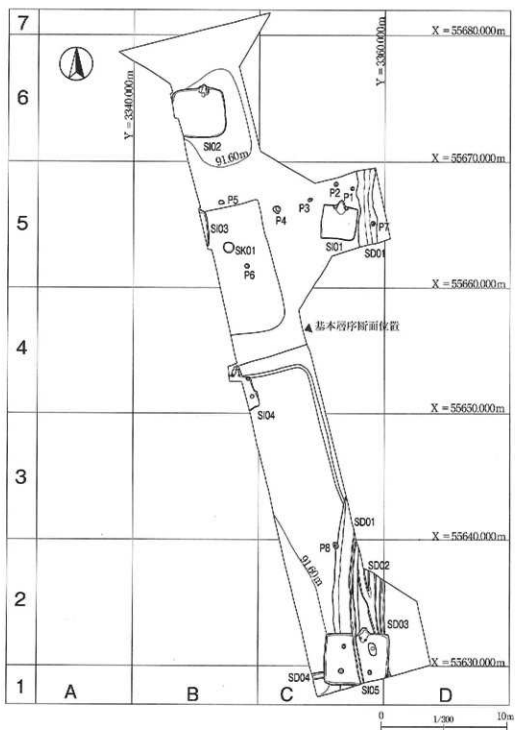
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡 遺跡範囲

1 : 25,000



第1表 周辺の遺跡一覧

県道 番号	市町村 番号	所在地	遺跡名	現状	立地	種別	時期
3221	197	兵庫塚町 309-3 ほか	旭丘団地北遺跡	宅地・畑	微高地	集落跡	縄文
3222	196	西川田町 1663-1 ほか	塚山古墳群	山林・畑	段丘	古墳	古墳
3226	202	雀宮町 1665-14 ほか	北岩松原遺跡	畑	段丘	集落跡	古墳・奈良
3224	203	雀宮町 1118-1 ほか	若松原遺跡	畑	平地	集落跡	縄文～古墳
3225	204	雀宮町 1665-3 ほか	一向寺別院付近遺跡	畑	平地	集落跡	古墳
3223	205	雀宮町 1117-5 ほか	二軒倉遺跡	畑・宅地	段丘	集落跡	弥生・古墳
4193	206	雀宮町 1115-2 ほか	西原北遺跡	畑	段丘	集落跡	縄文～古墳
4192	207	雀宮町 1080-43 ほか	瀧西遺跡	畑	平地	集落跡	古墳
4299	208	雀宮町 226-1 ほか	十畳木古墳	宅地	段丘	古墳	古墳
4300	209	雀宮町 125-18 ほか	綾女塚古墳	宅地	段丘	古墳	古墳
4303	213	雀宮町 401-2 ほか	雀宮駅東遺跡	畑	段丘	集落跡	奈良
4304	214	雀宮町 444-2 ほか	牛塚東遺跡	畑	段丘	集落跡	奈良
4187	215	針ヶ谷町 1257 ほか	上坪遺跡	畑	段丘	集落跡	弥生～奈良
4200	216	針ヶ谷町 520 ほか	上坪新田遺跡	畑	段丘	集落跡	縄文～奈良
4202	218	針ヶ谷町 985 ほか	立海道遺跡	畑	平地	集落跡	古墳・奈良
4207	219	針ヶ谷町 911-2 ほか	見明遺跡	畑・墓地	平地	集落跡	縄文・弥生・奈良
4305	221	新富町 17 ほか	牛塚古墳	墓地	段丘	古墳	古墳
4208	225	雀宮町 1010-1 ほか	天狗原雀宮中前遺跡	畑・山林	平地	集落跡	縄文～古墳
4209	226	針ヶ谷町 350 ほか	島の前遺跡	畑	平地	集落跡	縄文・古墳・奈良
4210	227	針ヶ谷町 371-2 ほか	赤岩遺跡	畑	平地	集落跡	縄文・古墳
4218	230	南町 10 番 21 号ほか	赤土山遺跡	畑	段丘	集落跡	縄文・奈良
4219	231	富士見町 580-3 ほか	富士見団地北遺跡	畑	台地	集落跡	縄文・古墳
4306	232	下横田町 848 ほか	宇都宮機南遺跡	畑	段丘	集落跡	古墳
4307	233	茂原町 1106 ほか	多功神塚古墳群	畑	段丘	古墳	古墳
4309	239	茂原町 261 ほか	権現山北遺跡	畑・水田	段丘	集落跡	旧石器・弥生・古墳～ 平安
4310	240	茂原町 311 ほか	権現山古墳群	山林	段丘	古墳	古墳
4308	241	茂原町 898-1 ほか	茂原北原遺跡	畑	平地	集落跡	奈良
4298	242	針ヶ谷町 7 ほか	富士見向山遺跡	畑	台地	集落跡	古墳・奈良
4312	243	茂原町 853 ほか	西の前遺跡	畑	段丘	集落跡	奈良
4313	244	茂原町 401-2 ほか	大日輪古墳	山林	段丘	古墳	古墳
4315	245	茂原町 412 ほか	愛宕塚古墳群	山林	段丘	古墳	古墳
4314	246	茂原町 423 ほか	愛宕塚東遺跡	畑	段丘	集落跡	古墳・奈良
4316	247	茂原町 790 ほか	前畑遺跡	畑	段丘	集落跡	奈良
4318	248	茂原町 527 ほか	小露遺跡	畑	段丘	集落跡	奈良
4319	249	茂原町 450 ほか	江面遺跡	畑	段丘	集落跡	奈良
4321	250	茂原町 590-1	上神主・茂原宮衝遺跡	水田	丘陵	官衙	奈良・平安
4198	356	針ヶ谷町 583-1 他	針ヶ谷新田古墳群	山林	台地	古墳	古墳
4186	357	幕田町 1341 他	幕田古墳群	山林	台地	古墳	古墳
3289	391	城南 3 丁目 15-6 他	城南三丁目遺跡	畑・宅地	丘陵	集落跡	奈良・平安
3220	392	兵庫塚町 1807-5 他	塚山北遺跡	宅地・畑	平地	集落跡	古墳
3218	395	幕田町字東屋敷 885-4	東屋敷遺跡	畑・林	丘陵	集落跡	縄文
4184	399	幕田町字堂前 1275 他	堂前東遺跡	畑・山林	段丘	集落跡	古墳・奈良
4195	400	雀宮町字若松原 1109-1	若松原南遺跡	畑	微高地	集落跡	古墳
4194	401	雀宮町字瀧西 1072-1	瀧西南遺跡	宅地・畑	微高地	集落跡	古墳・奈良
4203	402	雀宮町丁目 742-12	雀の宮西丁目遺跡	宅地	台地	集落跡	古墳
4204	403	雀宮町字大谷田 996-60	大谷田遺跡	宅地・畑	台地	集落跡	奈良・平安
8831	407	針ヶ谷町字二子塚 410-3	二子塚北遺跡	畑	段丘	集落跡	弥生
4216	408	針ヶ谷町字瑞穂 206 他	瑞穂遺跡	畑	丘陵	集落跡	縄文・奈良
3215	429	西川田町 477-1 ほか	漆川第一小南遺跡	畑	段丘	集落跡	古墳・歴史
4183	432	幕田町字東屋敷 957 他	東屋敷古墳	山林	丘陵	古墳	古墳
3290	433	城南 3 丁目 6-3 ほか	城南三丁目南遺跡	畑	丘陵	集落跡	奈良・平安
4185	434	兵庫塚町西原 230 他	兵庫塚西原遺跡	山林	微高地	集落跡	古墳・奈良
4217	451	針ヶ谷町 246 他	岡田山遺跡	宅地・畑	丘陵	集落跡	古墳～平安
4317	464	茂原町 770 他	西下谷田遺跡	林	丘陵	集落跡	奈良・平安
4320	465	茂原町 647 他	茂原向原遺跡	畑・林	丘陵	集落跡	古墳・平安
4189	198	兵庫塚 1 丁目 1659-54	旭ヶ丘団地遺跡	畑・宅地	段丘	集落跡	縄文
8471	520	針ヶ谷町 484	針ヶ谷新田遺跡	宅地	平地	集落跡	弥生・古墳



第3図 全体図

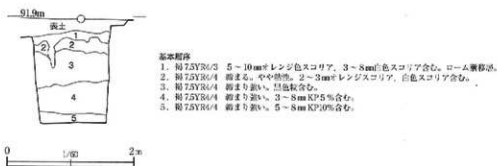
第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

調査は、令和2年1月6日から25日まで行い、調査の結果、古墳時代から奈良・平安時代にかけての竪穴住居跡5軒、土坑1基、近世の溝1条、時期不明のピット8基、溝3条を確認した。竪穴住居跡は完掘したものは3軒で、残りの2軒は大部分が調査区外に延びている。調査面積は420㎡である。遺跡は耕作によりローム面まで削平されており、遺構の残り状況としては決して良いものではなかった。出土した遺物は遺構の数の割には少なく、その内訳は縄文土器2点、黒曜石片3点、土師器塚53点、壺3点、甕128点、須恵器塚2点、甕4点、瓦3点、石製品5点、内耳土器2点、不明鉄製品1点などである。

第2節 基本層序（第4図、図版2）

遺跡周辺は宅地化が進み、ところどころに小規模な農地が点在している。これらの農地の開墾により調査区付近ではローム層まで削平されている。一部ローム漸移層が確認されたものの、遺構確認面のほとんどはローム層である。基本層序はローム漸移層が確認できる部分を選んで試掘坑の掘削を行って層位を確認した。調査地点の現況は畑地であるが、風倒木根が多数認められたことから、以前は山林であったと考えられる。



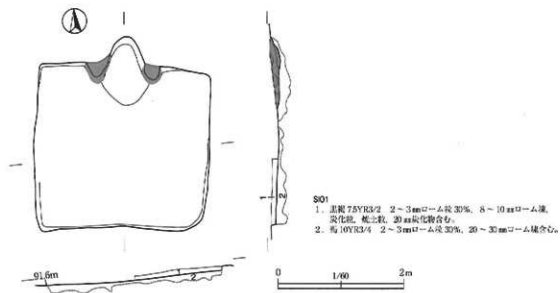
第4図 基本層序

第3節 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

SI01（第5～7図、第2・10表、図版2・6）

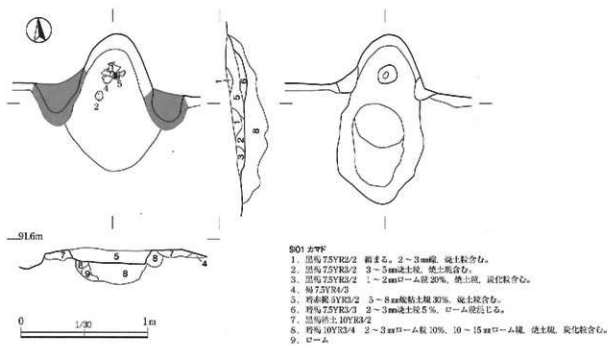
本跡は調査区の北部5-Cグリッドに位置し、SD01に切られている。平面形は方形、規模は東西2.8m、南北2.65mを測り、主軸方向はN-4°-Wを示す。確認面からの深さ10cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。柱穴は認められなかった。カマドは北壁中央に設けられ、規模は長さ1.1m、幅1.2mを測り、軸は黒褐色粘土で作られている。火床はローム層を掘り込み、暗褐色土を埋め戻して作られており、高さは床面よりやや低い。焼土は確認されなかった。燃焼部から土師器甕(3)、須恵器塚(2)、瓦(4・5)が纏まって出土したが、一括して廃棄されたものと考えられる。瓦は被熱を受けており、カマド構築材として利用されていたものと考えられる。覆土は黒褐色土の自然堆積と考えられる。遺物は住居内からは確認されず、すべてカマド覆土から出土した。内訳は土師器塚2点(29g)、甕5点(58g)、須恵器塚2点(81g)、女瓦2点(164g)である。時期は8世紀後半から9世紀代と考えられる。



SIO1

1. 黒靨 75YR3/2 2-3mmローム粒30%, 8-10mmローム塊, 炭化粒, 軟土粒, 30mm炭化粒含む。
2. 黒 10YR3/4 2-3mmローム粒30%, 20-30mmローム塊含む。

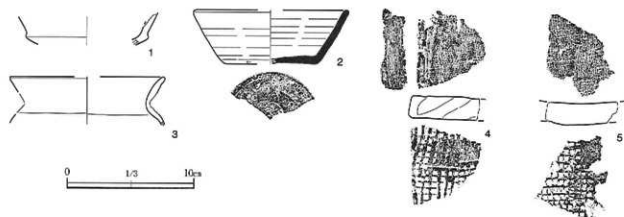
第5図 SIO1



SIO1 カマド

1. 黒靨 75YR2/2 細まる, 2-3mm粒, 硬土粒含む。
2. 黒靨 75YR3/2 3-5mm硬土粒, 硬土塊含む。
3. 黒靨 75YR3/2 1-2mmローム粒20%, 硬土粒, 炭化粒含む。
4. 褐 75YR4/3
5. 褐色靨 5YR3/2 5-8mm炭粒土塊30%, 硬土粒含む。
6. 褐色 75YR3/3 2-3mm硬土粒5%, ローム粒はじく。
7. 黒靨 10YR3/2
8. 褐色 10YR3/4 2-3mmローム粒10%, 10-15mmローム塊, 硬土粒, 炭化粒含む。
9. ローム

第6図 SIO1 カマド



第7図 SIO1 出土遺物

第2表 SIO1 出土遺物観察表

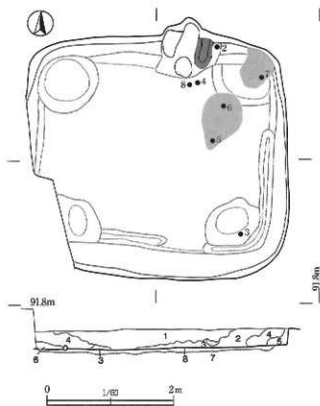
番号	種類	器形	口径	器高	口径	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土器製	杯	-	-	-	-	磁砂状	灰白7SYR8/2	普通	口縁唇縁リブ、体部外側へラ削り、内面塗あり。	カマド壁土	
2	須弥製	杯	(12.2)	4.3	(7.2)	-	石灰砂	MCNS/0	普通	口縁ラ線彫、体部外側下層へラ削り、底部へラ切り。	カマド壁土	
3	土器製	台付壺	(12.2)	-	-	-	磁砂状	明赤期25YR3/6	二次焼成	口縁唇縁ナデ、体部外側へラ削り、内面ナデ。	カマド壁土	
番号	種類	寸法	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考				
4	瓦片	-	石灰、白色粒、粗砂状	にぶい黒7SYR6/3	二次焼成	片面垂直紋、凸面格子目タタキ、雑念き作り。	カマド壁土					
5	瓦片	-	石灰、白色粒、粗砂状	にぶい黒7SYR6/3	二次焼成	片面垂直紋、一部ナデ、凸面格子目タタキ。	カマド壁土					

SIO2A・B (第8～10図, 第3・10表, 図版2・3・6・7)

本跡は調査区の北端6-Bグリットに位置し、一部調査区外に延びている。建て替えが行われ、建て替え後の住居跡をSIO2A、建て替え前の住居跡をSIO2Bとする。SIO2Aは平面形が隅丸方形、規模は東西4.15m、南北3.9mを測り、主軸方向はN-4°-Wを示す。確認面からの深さは30cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はSIO2Bを暗褐色土で埋め戻して作られ、ほぼ平坦である。柱穴は認められなかった。カマドは北壁中央に設けられ、規模は長さ0.95m、幅0.8mを測り、黒褐色粘土で袖が作られていた。火床は床面とほぼ同じ高さで、若干焼土が認められた。覆土は7層に分層し、黒褐色土を主体とする自然堆積である。住居北東隅から黒褐色粘土が纏まって出土した。

SIO2Bは平面形が隅丸方形、規模は東西3.8m、南北3.2mを測り、主軸方向はN-0°を示す。SIO2Aの床面からの深さは7cmである。壁はやや外傾して立ち上がり、東壁から南壁にかけて壁溝が認められた。規模は幅20cm、深さ約1cmである。床面は四隅を掘り込んで埋め戻しているほか、ローム面ではほぼ平坦である。柱穴は認められなかった。カマドは北壁中央にわずかな掘り込みの痕跡を確認し、ここがカマドと考えられる。

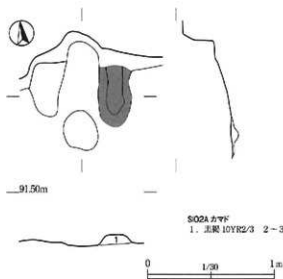
遺物はカマド右袖の外側の床面上から土師器杯(2)が出土したほか、住居中央からカマド前にかけての覆土中から土師器杯、甕が纏まって出土した。これらの遺物は住居北東方向から投げ込まれたものと推察される。内訳は土師器杯8点(405g)、甕50点(1,697g)、黒曜石1点(5g)、礫3点4.4kgである。時期は8世紀初頭と推測される。



SIO2

1. 混砂 10YR2/3 2-3mmロ-ム粒 20%、3-5mm粘土粒、炭化粒、糞含む。
2. 混砂 10YR2/3 2-4mmロ-ム粒 40%、10mmロ-ム塊、粘土粒、炭化粒含む。
3. 混砂 10YR2/3 2-3mmロ-ム粒 30%、ロ-ム塊、ロ-ム土、炭化粒、粘土粒含む。
4. 混砂 10YR2/2 1-2mmロ-ム粒 20%、5-8mmロ-ム塊、褐色土含む。
5. 混砂 7.5YR2/2 2-3mmロ-ム粒 40%、5-10mmロ-ム塊含む。
6. 混砂 7.5YR2/2 1-2mmロ-ム粒 5%含む。
7. 混砂 10YR2/3 10-20mm灰色粘土粒、5-8mmロ-ム塊含む。
8. 混砂 10YR3/3 2-3mmロ-ム粒 20%、ロ-ム塊含む。

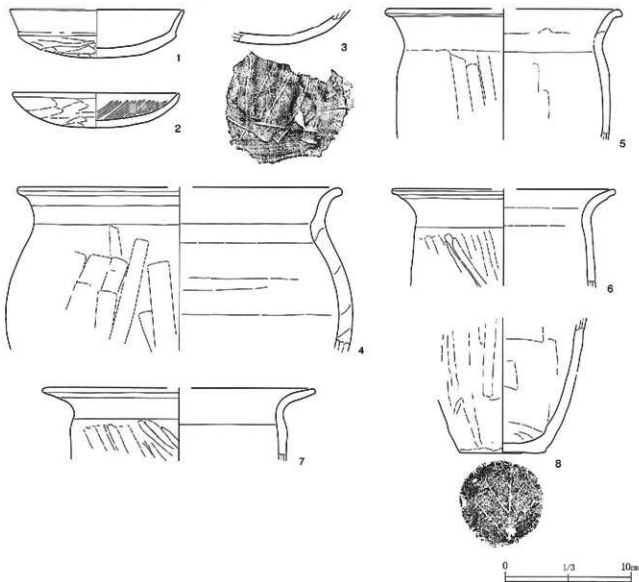
第8図 SIO2・B



SIO2A カマド

1. 混砂 10YR2/3 2-3mmロ-ム粒、30mm黒褐色粘土塊含む。

第9図 SIO2A カマド



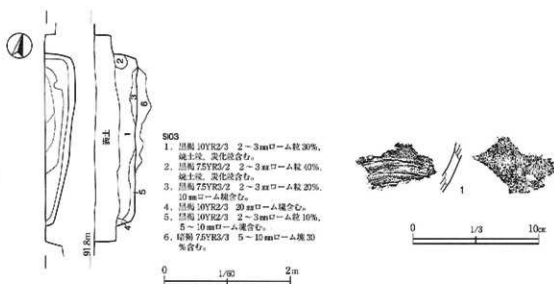
第10図 S102出土遺物

第3表 S102 出土遺物観察表

番号	器種	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地域	手法の呼称	出土状況	備考
1	土製器	杯	(13.5)	3.9	-	黄砂状	にぶい黄7.5YR6/4	二次焼成	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ナデ。体部外面に肌張。	1区覆北	
2	土製器	杯	13.2	2.8	-	黄砂状、赤褐色粒	粉2.5YR6/6	普通	口縁部横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面トガキ。	図示	
3	土製器	杯	-	-	-	黄砂状、赤褐色粒	にぶい黄7.5YR6/4	普通	体部外面三角ナデ、下位ヘラ削り、内面ナデ。	図示	器部外面に肌張残の「×」の痕跡
4	土製器	甕	(25.4)	-	-	石英、白色粒	黒靑7.5YR3/2	普通	口縁部横ナデ、体部外面のヘラ削り、内面赤のヘラナデ。器部に肌張、体部外面に肌張。	図示	
5	土製器	甕	(18.2)	-	-	石英、金色の雲母	明赤靑2.5YR5/6	普通	口縁部横ナデ、体部外面のヘラ削り、内面赤のヘラナデ。	図示	
6	土製器	甕	(17.6)	-	-	石英、金色の雲母	にぶい赤靑5YR6/4	普通	口縁部横ナデ、体部外面のヘラ削り、内面ナデ。	図示	
7	土製器	甕	(21.4)	-	-	石英、雲母	黒靑0	普通	口縁部横ナデ、体部外面のヘラ削り、内面ナデ。	図示	
8	土製器	甕	-	-	6.8	石英、長石多量、雲母	にぶい黄7.5YR6/3	普通	体部外面のヘラ削り、内面赤のヘラナデ、底部に肌張、外削ナデ。	図示	

SI03 (第11図, 第4・10表, 図版3・7)

本跡は調査区の北部5-Bグリットに位置し, 調査区外に延びている。平面形は隅丸方形と考えられ, 規模は南北2.9mを測り, 主軸方向はN-8°-Wを示す。確認面からの深さ22cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床は黒褐色土を埋め戻して作られ, ほぼ平坦である。柱穴・カマド・炉等の施設は確認できなかった。覆土は5層に分層し, 黒褐色土を主体とする自然堆積である。遺物は覆土中より出土した土師器甕片1点(21g)のみである。時期は不明である。



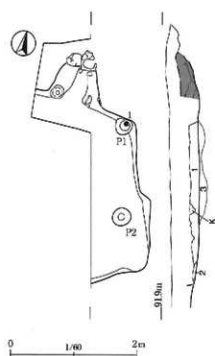
第11図 SI03 及び出土遺物

第4表 SI03 出土遺物観察表

番号	種類	器種	口型	器高	底径	胎土	色調	焼成	手決の特徴	出土状況	備考
1	土師器	甕	-	-	-	石灰, 焼砂粒	浅黄緑7.5YR2/3	若造	知原外瀬刷毛目, 内面ヘラナデ。	覆土	

SI04 (第12~14図, 第5・10表, 図版3・4・7・8)

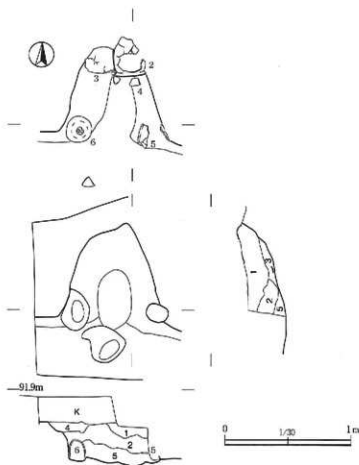
本跡は調査区の中央部4-Bグリットに位置し, 調査区外に延びている。住居跡のほとんどは削平されていたが, カマド付近のみがよく残っていた。平面形は隅丸方形と考えられ, 規模は南北2.8mを測り, 主軸方向はN-21°-Wを示す。カマド付近の確認面からの深さは27cmである。壁は明確ではなかった。床面は暗褐色土を埋め戻して作られ, ほぼ平坦である。柱穴は認められなかった。北東隅からP1が確認されたが, 柱穴とは考えづらい。規模は径25cm, 深さ5cmである。P2も床面を掘削したのちに確認したもので, 柱穴とは断定しづらい。規模は径30cm, 深さ10cmである。カマドは北壁の東寄りに設けられていたと考えられる。袖等の住居内への施設は認められない。規模は長さ0.9m, 幅0.9mを測る。焚き口左側には土師器甕(6)が逆位で立てられていた。また, 右側も攪乱を受けているが土師器甕(5)が口縁部を下に向けた状態で出土したことから, これも本来は立てられていたものと考えられる。煙道部には体部を一部欠いた土師器甕(2)が横位で出土した。これは土師器甕を利用した煙道と考えられ, 土師器甕(3)は出土した向きから支えに使われていたものと推測される。火床は床面より若干窪んでいるが, 焼土は確認できなかった。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積である。遺物はカマドのほか, P1から土師器杯(1)が出土した。内訳は, 土師器杯1点(10g), 甕21点(2,875g), 細片4点(10g)である。時期は10世紀代と考えられる。



SIO4

1. 黒靨 10YR3/2 1~2mmローム粒 30%、
粘土粒、炭七粒、ローム粒含む。
2. 黒靨 10YR3/2 ローム土 30%含む。
3. 黒靨 10YR3/3

第12図 SIO4



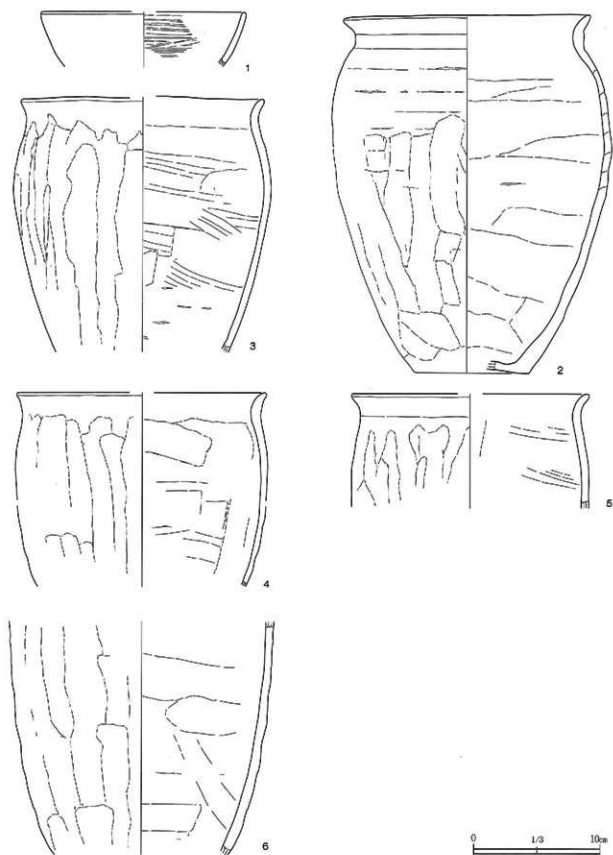
SIO4 カマド

1. 黒靨 10YR2/3 2~3mm粘土粒、ローム粒 5%含む。
2. 黒靨 10YR2/3 2~3mmローム粒 20%、粘土粒含む。
3. 黒靨 7.5YR4/3 3~4mm粘土粒 5%含む。
4. 黒靨 10YR2/3 2~3mmローム粒 20%含む。
5. 黒靨 7.5YR3/2 ローム粒、10~20mm粘土塊含む。

第13図 SIO4 カマド

第5表 SIO4 出土遺物観察表

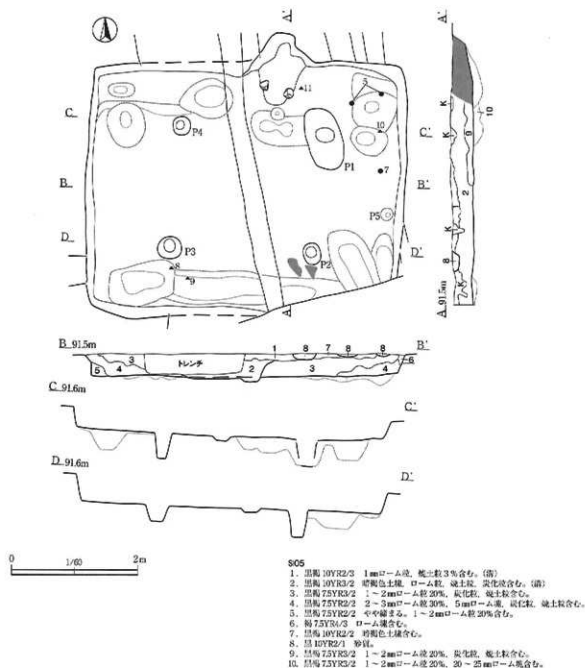
番号	材質	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	平面的特徴	出土位置	備考
1	土製器	杯	(162)	-	-	粗砂粒	黒7.5YR6/6	普通	口縁部外面斜ナデ、内面ミガキ発色 色発色、口縁部外面に黒斑。	図示	
2	土製器	甕	196	38.6	(92)	石英、粗砂粒	黒黄靨10YR3/2	普通	口縁部斜ナデ、体部外面上段ナデ、 下段縁のヘラ削り、子着縁のヘラ削り、 内面縁のヘラナデ。	図示	
3	土製器	甕	(192)	-	-	石英、粗砂粒	黒黄靨7.5YR3/3	普通	口縁部斜ナデ、体部外面縁のヘラ削り、 内面縁のヘラナデ。	図示	
4	土製器	甕	(196)	-	-	粗砂粒	黒靨10YR3/1	普通	口縁部斜ナデ、体部外面縁のヘラ削り、 内面縁のヘラナデ。	図示	
5	土製器	甕	(188)	-	-	石英、粗砂粒	黒靨10YR3/1	普通	口縁部斜ナデ、体部外面ヘラ削り、 内面ヘラナデ。	図示	
6	土製器	甕	-	-	-	石英、粗砂粒	黒靨10YR3/1	普通	体部外面ヘラ削り、内面縁のヘラナデ。	図示	



第 14 図 S104 出土遺物

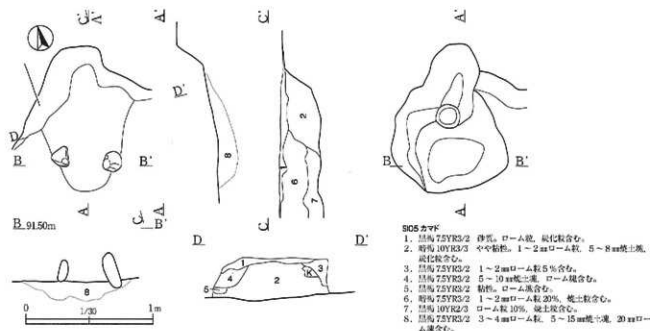
S105 (第15～17図, 第6・10表, 図版4・5・8・9)

本跡は調査区の南端1・2-Cグリットに位置し, SD01に切られている。平面形は方形, 規模は東西5.1m, 南北4.1mを測り, 主軸方向はN-3°-Eを示す。確認面からの深さは41cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面は南壁際を幅50cmの带状に掘り込むものと隅を土坑状に掘り込む掘方を黒褐色土で埋め, 中央から西側にかけてはロームを掘り残し平坦である。P2の南側から焼土が確認されたが, 位置的には炉とは考えづらい。柱穴はP1～P4が確認された。P1の開口部は掘方が含まれていると考えられ, ほかの柱穴に比べ大きくなっている。P1を除く規模は径27～40cm, 深さ25～36cmである。P5は床面掘削後に確認し, 対面する西壁側にはピットが確認できなかったことから柱穴とは考えられない。規模は径20cm,



第15図 S105

深さ 16cmである。カマドは北壁中央に設けられ、規模は長さ 1.15 m、幅 0.9 mである。構築材は遺存していなかったため不明である。焚口部の両袖には川原石が立てられてあった。火床は床面とほぼ同じ高さであるが、焼土は確認できなかった。覆土は 7 層に分層し、黒褐色土を主体とする自然堆積である。遺物は土師器壺(5)が北東隅の床面上から、編み物石(8・9)は P3 の南側床面上から、編み物石(10)は P1 の東、編み物石(11)はカマド右側からいずれも床面付近から出土した。内訳は、土師器坏 42 点(556g)、壺 3 点(258g)、甕 39 点(999g)、編み物石 5 点(1,414g)である。時期は 7 世紀代と考えられる。



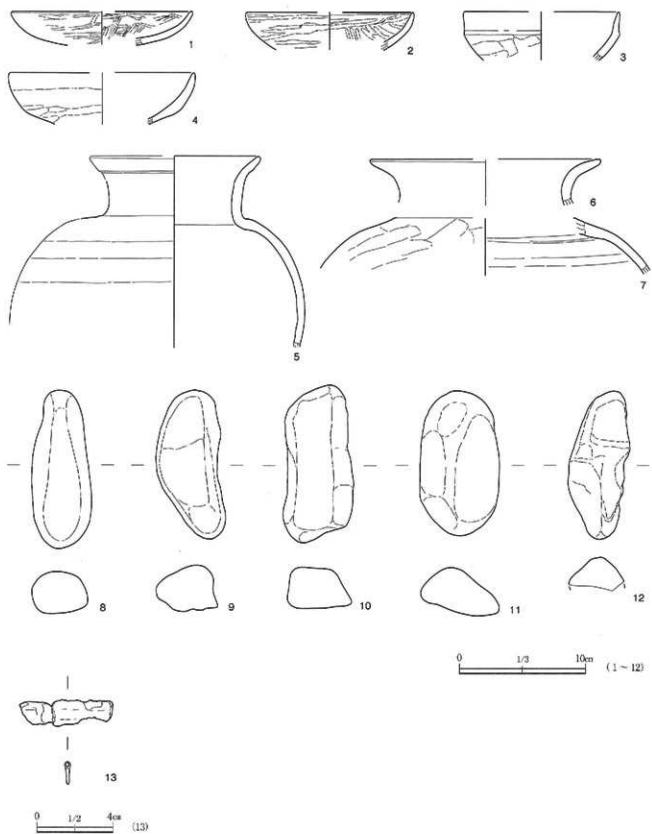
第 16 図 SI05 カマド

第 6 表 SI05 出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色相	焼成	手印の有無	出土位置	備考
1	土師器	杯	(14.3)	-	-	赤褐色泥、微砂粒	明赤黄25YR5-6	普通	内外面ミガキ。	表土	
2	土師器	杯	(13.3)	-	-	赤褐色泥、微砂粒	明赤黄25YR5-6	普通	内外面ミガキ。	3区敷方	
3	土師器	杯	(12.3)	-	-	微砂粒	出黄粒7.5YR5/1	普通	口縁部オナテ、体部外周へウ張り、内面凹凸。	2区敷方	
4	土師器	杯	(14.7)	-	-	細砂粒	浅黄粒7.5YR5/4	普通	口縁部オナテ、体部外周上位オナテ、下位へウ張り、内面オナテ。	1区敷方	
5	土師器	壺	(13.4)	-	-	細砂粒	浅黄粒7.5YR5/3	普通	口縁部オナテ、体部外周ミガキ、内面へウナテ。	4区	
6	土師器	壺	(18.2)	-	-	石英、粗砂粒	浅黄粒7.5YR5/3	普通	口縁部オナテ。	1区表土	7と同一致。
7	土師器	壺	-	-	-	石英、粗砂粒	浅黄粒7.5YR5/3	普通	体部外周部のへウ張り、内面傾のオナテ。	4区	

番号	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	特徴	出土位置	備考
8	削み物石	12.6	4.7	3.4	269.0	燧灰岩	串状の自然石で、断面割れ面を呈する。	4区	
9	削み物石	11.9	5.0	3.6	311	燧岩	平尖部でやや折れ面が、断面も不整形を呈し形状に際っていない。	4区	
10	削み物石	12.6	5.3	3.3	347	燧岩	角が尖るを持った台形状を呈する。	4区	
11	削み物石	11.6	6.3	3.6	344	燧岩	歪内部の自然石で、断面三角形状を呈する。	4区	
12	削み物石	11.8	4.4	2.6	143	チャート	串状の自然石で、断面は凸凹している。	3区敷方	

番号	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	特徴	出土位置	備考
13	不明鉄製品	4.9	1.4	0.3	2.8	鉄	径 1mmの本芯に薄く鉄板を巻いたもの。刃部は認められない。	3区表土	

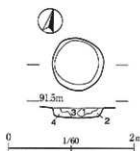


第 17 図 S105 出土遺物

(2) 土坑

SK01 (第18図, 第11表, 図版5)

本跡は調査区の北端5-Bグリットに位置し、西側約1mにSI03が隣接している。平面形は円形、規模は径0.8m、確認面からの深さ12cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。覆土は4層に分層し暗褐色土を主体とする人為的埋戻しである。遺物は出土しなかった。時期は断定できないが古代のものと考えられる。



SK01

1. 野鳥 10YR3/4 緑さる。2-4mmローム粒 30%。20mmローム塊含む。(人為的埋戻し)
2. 野 7.5YR4/3 2-3mmローム粒 40%含む。(人為的埋戻し)
3. 野鳥 10YR3/4 2-4mmローム粒 40%。炭化穀。焼土塊含む。(人為的埋戻し)
4. 野鳥 7.5YR3/3 2-4mmローム粒 30%。5mmローム塊含む。

第18図 SK01

(3) 溝

SD01 (第19～21図, 第7・12表, 図版5・9)

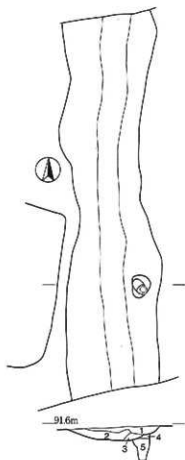
本跡は調査区の南端2・3-Cグリットと北部5-Cグリットで確認した。SI01・05を切っている。規模は長さ2・3-Cグリットで15.5m、5-Cグリットで6m、調査区外の部分を推定すると全長約42mを測る。上幅1.4～2.0m、下幅0.2～0.4m、深さ0.15～0.25mである。主軸方向はN-0°を示す。溝はやや蛇行しながら南北に通る。断面形は、西側の法面が東側の法面に比べ緩やかに立ち上がり、すり鉢状を呈している。底面はほぼ平坦で、やや北から南に向かって傾斜している。覆土は2・3-Cグリットでは8層、5-Cグリットでは3層に分層し、いずれも暗褐色土を主体とする自然堆積である。遺物は5-Cグリットの覆土中より内耳土器(2)が出土した。内訳は土師器甕3点(20g)、男瓦1点(60g)、内耳土器2点(211g)、黒曜石3点(11g)である。時期は出土した内耳土器から、近世の所産と考えられる。

SD02 (第20図)

本跡は調査区の南端2-Cグリットに位置し、SD01の東に隣接し、ほぼ平行して走る。SI05を切っている。規模は長さ4.9m、上幅0.38～0.6m、下幅0.2～0.53m、深さ0.04～0.07mである。主軸方向はN-1°-Wを示す。断面形はすり鉢状を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土は2層に分層し、黒褐色土を主体とする自然堆積である。遺物は出土しなかった。時期は近世以降である。

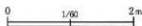
SD03 (第20図)

本跡は調査区の南端2-Cグリットに位置し、SD02の東に隣接し、ほぼ平行して走る。SI05を切っている。規模は長さ4.5m、上幅0.3～0.35m、下幅0.1～0.15m、深さ0.14mである。主軸方向はN-1°-Wを示す。断面逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積である。遺物は出土しなかった。時期は近世以降である。



SD01

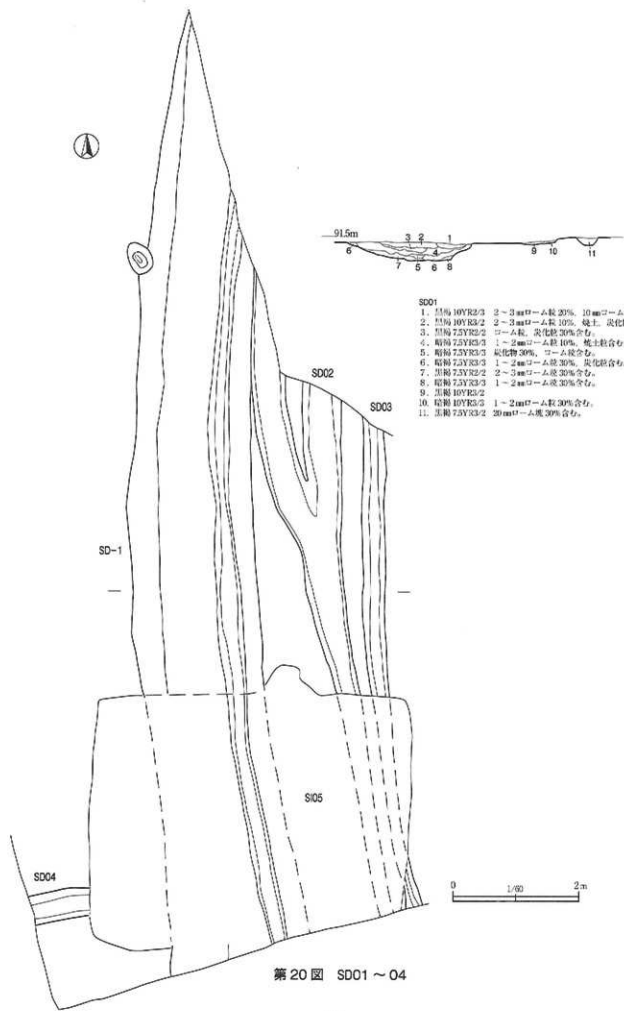
1. 単位層 75YR2/3 やや硬まる。3-4mmローム粒 10%、5-8mmローム塊。黒褐色土混じる。
2. 単位層 75YR2/2 3-4mmローム粒 20%、洗土混じる。
3. 単位層 10YR3/4 3-5mmローム粒 20%、黒褐色土混、ローム塊混じる。
4. 層 75YR6/4 硬まり弱い、ローム粒。
5. 層 75YR6/3 硬まり弱い、2-4mmローム粒、5mmローム塊 20%含む。



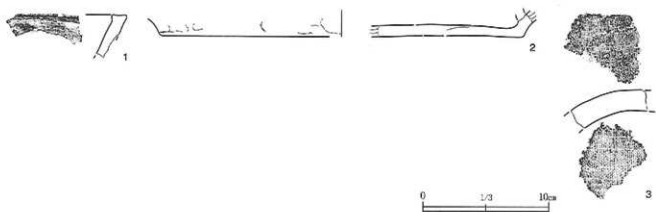
第 19 図 SD01

SD04 (第 20 図)

本跡は調査区の南端 1-C グリットに位置し、SI05 を切っている。規模は長さ 1.0 m、上幅 0.48 m、下幅 0.25 m、深さ 0.17 m である。主軸方向は N-80°-E を示す。断面逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積である。遺物は出土しなかった。時期は近世以降である。



第 20 図 SD01 ~ 04



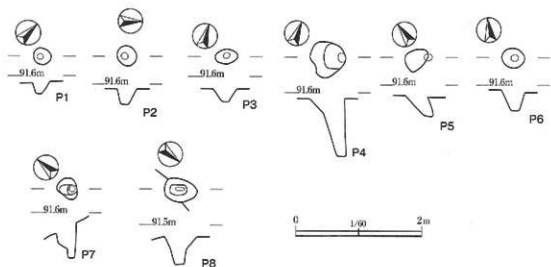
第21図 SD01 出土遺物

第7表 SD01 出土遺物観察表

番号	種類	器種	工法	器高	口径	胎土	色澤	焼成	手法の特徴	出土状況	備考
1	土師瓦 土盤	内耳	-	-	-	石英、雲母	灰褐色SYR6/2	普通	内筋ナシ。	5-Cグ リット層土	
2	土師瓦 土盤	内耳	-	(28.8)		石英、雲母	にぶい赤褐色SYR5/4	普通	体部外筋和泥圧入。底部刷目の残存。 内筋ナシ。	5-Cグ リット層土	
番号	種類	寸法	胎土	色澤	焼成	手法の特徴	出土状況	備考			
3	湧瓦	-	石英、雲母粒	にぶい赤褐色SYR7/3	二次焼成	内筋ナシ、西面右目取。	5-Cグリッ ト層土				

(4) ビット

ビットは8基を確認した。2-Cグリットに位置するP8以外は、5-B・Cグリットに集中する。しかし、P4・7以外は柱穴としては不十分な深さである。また、精査を行ったが獨立柱建物跡を確認することはできなかった。個々のビットは平・断面図を第22図、規模を第8表に示した。



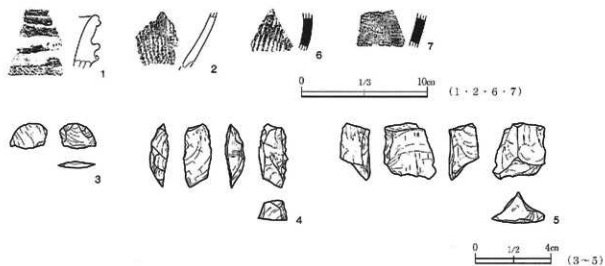
第22図 ビット

第8表 ビット一覧表

番号	径	深さ	番号	径	深さ
1	28×26	20	5	40×36	31
2	30×32	25	6	38×32	33
3	38×24	11	7	35×32	58
4	57×58	94	8	52×36	43

(5) 遺構外出土遺物 (第23図, 第9表, 図版9)

遺構外より出土した遺物をここにまとめる。内訳は縄文土器2点 (45g), 土師器甕10点 (21g), 須恵器甕4点 (39g), 陶器2点 (29g), 磁器2点 (3g) である。その内, 特徴的なものについて図示する。



第23図 遺構外出土遺物

第9表 遺構外出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	出土	色相	焼成	手取の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	-	-	-	石英, 粗砂粒	に灰・磁7SYR6/4	骨焼	口縁部片で, 底部により支連意識され, 刺文が施文されている。	3Cグレット層 遠面	
2	縄文土器	深鉢	-	-	-	石英, 粗砂粒	に灰・赤磁5YR5/4	骨焼	類似の刺文	5Aグレット層 遠面	
6	須恵器	甕	-	-	-	粗砂粒	黒灰10YR5/1	骨焼	外底平行クタクキ。	6Aグレット層 遠面	
7	須恵器	甕	-	-	-	黒色泥	黒灰N3/0	良	外底平行クタクキ。	5Aグレット層 遠面	

番号	種別	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	材質	特徴	出土位置	備考
3	陶片	19	13	3	0.7	黒曜石 (高砂山系)	石器加工工程上の産片か	S2) 覆土	
4	石核	34	15	10	6.8	黒曜石 (高砂山系)	台形状を呈し, 石等の加工工程上の石材	S2-1) 灰土	
5	石核	30	27	16	9.7	黒曜石 (高砂山系)	三角柱状を呈する, 石器の加工工程上の石材	2) グレット S3) 覆土	

第4節 総括

今次調査の結果、古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居跡5軒、土坑1基、近世の溝1条、その他の時期不明のピット8基、溝3条を確認した。

確認調査の結果では開発区域の東側半分ほどからは遺構は確認されず、調査区域は開発区域の西端に限られることとなった。開発区域は、雑壇状に東に向かって傾斜している。このことから、遺跡は新川の右岸、台地縁辺に立地し、遺跡の範囲は西側に延びることが考えられる。竪穴住居跡はSI01が須恵器環(2)から8世紀後半から9世紀初頭、SI02は土師器環(2)から8世紀前半、SI04は土師器甕が豊富であるが環類が少ないため10世紀代と考えられる。SI05は土師器環が破片であることから判然としないがおおむね7世紀代と考える。全体的に遺物の量が少なく集落の端である可能性があることから、推測の域を出ないが集落は古墳時代から平安時代にかけて営まれたものと考えられる。

近隣の調査された遺跡を概観すると溜西南遺跡では古墳時代の竪穴住居跡21軒、土坑2基、奈良・平安時代の竪穴住居跡3軒、井戸2基、若松原遺跡では古墳時代の竪穴住居跡4軒、北若松原遺跡では古墳時代の竪穴住居跡26軒、平安時代の竪穴住居跡2軒が確認されている。各遺跡では竪穴住居跡の切り合い関係はほとんど見られないが、いずれも古墳時代を主体とする集落と考えられる。このことは、遺跡の西方約1kmに位置する塚山古墳群との関係が示唆されている。これらの遺跡に対して、本遺跡の主体となる時期は奈良・平安時代で、遺構の種類・数、遺物の量から考えても小規模な集落であることは否めない。本遺跡を含めたこれらの遺跡は、若松原遺跡が兵車川に面していることを除けば3遺跡は新川の右岸に立地している。溜西南遺跡は古墳時代前期、北若松原遺跡は古墳時代中期後葉～後期初、若松原遺跡は後期、溜西遺跡は奈良・平安時代を主体としている。このことによって本地域においては、ひとところにおいて弥生時代・古墳時代から奈良・平安時代にわたる継続した集落が営まれたわけではなく、時期ごとに定住地をずらしつつ移動したのではないかと考えられる。

本遺跡の周囲は既に宅地化されており、開発に伴う広範囲の調査が行いにくい環境ではあるが、小規模な調査の積み重ねによって、地域の歴史が解明されることに期待する。

第10表 遺構一覽表(竪穴住居跡)

番号	位置	平面形	規模	主軸方向	伊・竈	柱穴	出土遺物	時期
1	5-C	方形	東西2.8m、南北2.65m	N-4°-E	北壁	-	土器器坪・洗、灰土器片、瓦	8C後-9C
2A	6-3	隅丸方形	東西4.13m、南北3.9m	N-4°-W	北壁	-	土器器坪・洗	8C初
2B	6-3	隅丸方形	東西3.6m、南北3.2m	N-0°	-	-	-	
3	5-C	隅丸方形	南北2.9m	N-8°-W	-	-	土器器坪	
4	4-3	隅丸方形	南北2.8m	N-21°-W	-	-	土器器坪・洗	10C
5	1-2-C	方形	東西5.1m、南北4.1m	N-3°-E	北壁	4	土器器坪・洗、甕系物石	7C

第11表 遺構一覽表(土坑)

番号	位置	平面形	規模	主軸方向	覆土	出土遺物	時期
1	5-3	円形	径0.80	-	人為的な埋戻し	-	

第12表 遺構一覽表(溝)

番号	位置	断面形	規模	主軸方向	覆土	出土遺物	時期
1	2・3・5-C	十字溝状	上幅1.4-2.5、下幅0.2-0.4、溝深0.15-0.25	N-0°	自然堆積	内河土器	遺構
2	2-C	十字溝状	上幅0.28-0.6、下幅0.2-0.53、溝深0.04-0.07	N-1°-W	自然堆積	-	
3	2-C	溝台形	上幅0.2-0.35、下幅0.1-0.15、溝深0.14	N-1°-W	自然堆積	-	
4	1-C	溝台形	上幅0.65、下幅0.25、溝深0.17	N-80°-E	自然堆積	-	



調査区全景北（西から）



調査区全景南（西から）

図版 2



遺構確認状況 (南から)



基本層序 (西から)



SI01 (南から)



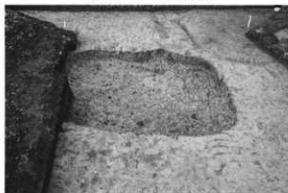
SI01 掘方 (南から)



SI01 カマド (南から)



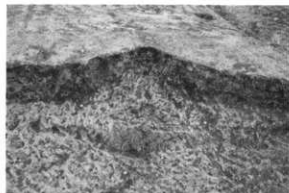
SI02 (南から)



SI02 掘方 (南から)



SI02 カマド (南から)



SI02 カマド掘方 (南から)



SI02 遺物出土状況 (東から)



SI02 遺物出土状況 (東から)



SI02 土層断面 (東から)



SI03 (東から)



SI03 掘方 (南から)



SI04 (東から)



SI04 掘方 (東から)

図版 4



SI04 カマド (南から)



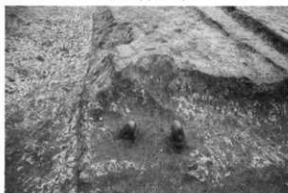
SI04 カマド掘方 (南から)



SI05 (東から)



SI05 掘方 (東から)



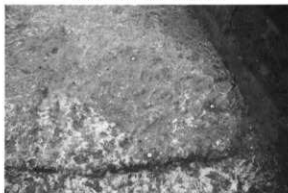
SI05 カマド (南から)



SI05 カマド掘方 (南から)



SI05 土層断面 (東から)



SI05 床面焼土 (西から)



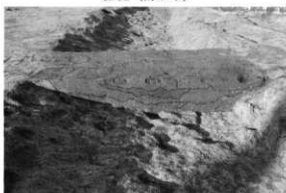
SI05 遺物出土状況（東から）



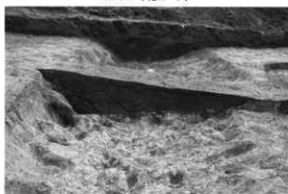
SD01（南から）



SD01（北から）



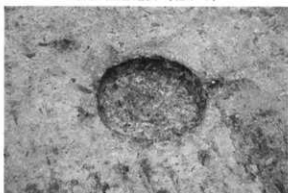
SD01 土層断面（南から）



SD01 土層断面（北から）



SD01 遺物出土状況（西から）



SK01（南から）



SK01 土層断面（南から）

図版6



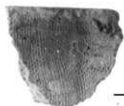
7-1



7-2



7-3



7-4



7-5

SI01出土遺物



10-1



10-2



10-4



10-5



10-6

SI02出土遺物

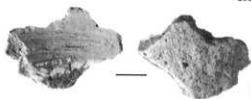


10-7



10-8

SI02出土遺物



11-1

SI03出土遺物



14-2



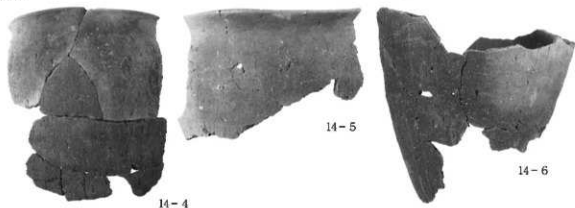
14-1



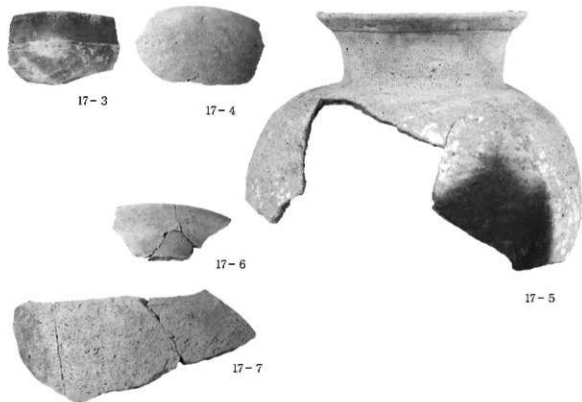
14-3

SI04出土遺物

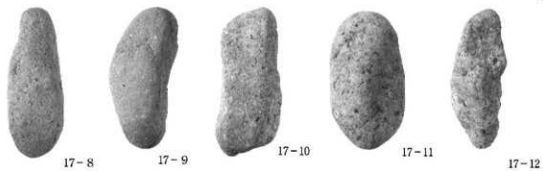
図版 8



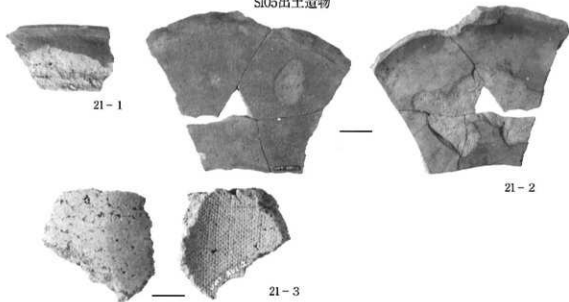
SI04出土遺物



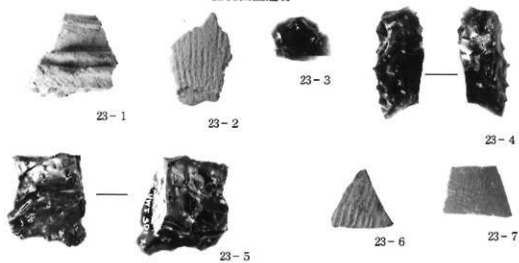
SI05出土遺物



SI05出土遺物



SD01出土遺物



遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ためにしいせき							
書名	溜西遺跡							
副書名								
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第107集							
編者名	三輪孝幸							
編集機関	財団法人日本竊業史研究所							
所在地	〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂3112 TEL0287-93-0711							
発行機関	宇都宮市教育委員会							
所在地	〒320-8540 栃木県宇都宮市旭1丁目1番5号 TEL028-632-2764							
発行年月日	令和2年(2020)7月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				m ²	
溜西遺跡	栃木県宇都宮市若松原 1丁目1080番19. 1081番1	9201	4192	36° 30' 6.33"	139° 52' 14.71"	20200106~ 200125	420 m ²	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
溜西遺跡	集落	縄文時代 古墳～奈良・平安 近世 時期不明	竪穴住居跡 土坑	5軒 1基	縄文土器 土師器、須恵器、瓦、 石製品			
			溝 ピット	1条 8基	内耳土器			
			溝	3条				
要約	遺跡は宇都宮市若松原1丁目に所在し、宝木台地の東縁、新川右岸に立地する。調査の結果、古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居跡を5軒確認し、奈良・平安時代を主体とする集落であることが確認された。							

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第107集

溜西遺跡

編集 財団法人日本竊業史研究所

栃木県那須郡那珂川町小砂3112

TEL 0287-93-0711

発行 宇都宮市教育委員会

宇都宮市旭1丁目1番5号

TEL 028-632-2764

印刷 株式会社松井ビ・テ・オ・印刷

栃木県宇都宮市陽東5-9-21

TEL 028-662-2511